

知識人の絵画 南画とその享受者

佐藤康宏

18世紀、江戸時代中期以降の日本では、中国における知識人のあり方に強い興味を抱いた人々によって、南画と呼ばれる絵画が盛んになる。その制作と鑑賞において、中国的教養というのは彼らを結びつける基盤となっただけでなく、彼らが生きる現実を理解しなおす手段ともなった。4人の画家の若干の作例をもとに、このことを説明してみる。

池大雅の「楽志論図」（梅澤記念館）には、柳澤淇園が題を書き、祇園南海が跋として後漢の仲長統の「楽志論」の文章を記している。中国の知識人の理想を理解できる教養は、そこに述べられる世界とはかけ離れたところに住む画家自身の現実を教えてくれたはずだ。大雅にできるのは、自分がまるで中国の知識人であるかのように演技することだった。「渭城柳色図」（敦井美術館）は、王維の有名な送別の詩に、自分と画家の五十嵐浚明との別れを重ね合わせる。そういう大雅の作る中国趣味の横溢した商品の顧客には、たとえば「瀟湘勝概図」の旧蔵者だった京都の御典医福井家があった。

與謝蕪村の「倣錢貢山水図」（京都国立博物館）は、金刀比羅に住む俳人菅暮牛のために描いたと考えられる。晩年の水墨画の傑作、「夜色楼台図」もまた中国的教養を共有する知人のために描いたのではないかと推測できる。「夜色楼台雪万家」の題が、明の李攀龍の詩に基づくことを知る人がこれを見たならば、遠くに暮らす友人のことを京都で静かに考えている、そういう主題だと理解できたことだろう。

浦上玉堂は、「寒林間処図」で、儒者姫井桃源が郷里の岡山に帰るのを、自作の七言古詩と絵画で祝っている。画面中心より少し右下の山中の茅屋でひとりの高士が瀑布をながめているのだが、その滝は女陰に見え、彼の頭上に聳える山々は、まぎれもなく屹立する男根の形を示している。画中の高士に擬せられているのは姫井桃源であり、3か月の長きにわたって岡山から遠ざかっていた桃源の鬱積した欲望が、郷里の妻ないし愛人によって解放される日が近いことを、玉堂は揶揄しながらこの送別図に表したと見える。江戸時代後期の知識人たちは、伝統的な詩画の世界に、現実の自分たち男どうしの戯れを持ち込んで遊ぶ、そんな藝術も実践していたと考えるべきだろう。

田能村竹田の「暗香疎影図」は、別府に遊んだ竹田が、浜脇の地の荒金呉石（通称たばこ屋儀八郎）のために描いた画である。呉石は梅を好んで梅亭と号した風流人であり、自題と絵画は、明らかに呉石を北宋の詩人林和靖になぞらえている。同時代の人物を過去の人物の扮装で描くことは、15世紀から17世紀の日本でも、17世紀の中国やオランダでも繰り返された行為だった。過去の文化が教養として共有され、過去と交流することに意味を見出す社会においては、目の前の現実を認識し、それをイメージの中で変容するために類似の手法が用いられる。江戸時代の南画で行なわれていたのは、特殊な表現ではなく、中国的教養を身につけ、自らが中国の知識人であるかのようにふるまい、ときには理想と現実とのギャップに苦しみながらも、理想的な世界をただ遠いものとしてながめるのではなく、自分たちの方へ引きつけて、自らが生きる世界をイメージに変えることだった。